

## 北総の「百庚申」

藤 由美

### 1. はじめに — 庚申塔と「百庚申」

庚申塔は、近世から近代の村落共同体建立の石塔を代表する普遍的で数も多い石造物です。庚申待は、六十日に一回、庚申の夜に眠った人間の体から三尸（さんし）が抜け出して天帝にその人の罪過を告げるのを避けるため徹夜するという道教に由来した信仰で、室町時代ごろから庚申講が行われるようになると、その供養の証しとして「庚申塔」を建立するようになり、その風習が、江戸時代に各地に定着しました。

近世庚申塔の関東における初出は、元和 9 年（1623）の足立区正覚院の弥陀三尊来迎塔と三郷市常楽寺の山王廿一社文字塔、千葉県最古は松戸市幸谷観音境内の寛永 2 年（1625）の山王廿一社文字塔です。

庚申信仰の石塔の下総地域への伝播は、主に江戸川に接する東葛地域からと推定され、君津・安房地域の山王系の庚申塔を含め、千葉県内では寛文 13 年（1673）までの初期庚申塔は約二百基を数えます。さらに延宝以降、三猿のほか地藏像や観音像、如来像など諸仏の彫像を施した石塔や文字のみの供養塔などいろいろな形態の庚申塔が急激に普及し、江戸中期には青面金剛像塔が定番化していきました。

江戸後期前半は「青面金剛」銘、文政期頃からは「庚申塔」銘の文字塔が主流となり、明治以降も建立されています。北総の村境の庚申塚に、これら各時期の歴代の庚申塔が数基から十数基以上建ち並ぶ姿は珍しくありませんが、北総の庚申塔群で特異なのは「百庚申」です。

北総によく見られる「百庚申」は、青面金剛像 10 基、その間に文字塔（「庚申塔」銘など）が 9 基ずつの 90 基、計 100 基を一時に建てる「多石百庚申」で、江戸後期から近代にかけて流行しました。

印西市・柏市・鎌ヶ谷市などの一部の「百庚申」は、各市の文化財に指定されて、調査・保存されていますが、開発で移転されたり、風化・損傷して整理されたり、また地震など倒れたまま埋もれたりして、その壮観な姿を失っていることも多く、調査が急がれています。

近年、私は印西市域を中心に未調査を含む「百庚申」三か所の記録調査を行い、また文献等の情報から、千葉県内の百庚申のリストアップを行いましたので、その概要を報告します。

### 2. 北総の「百庚申」探訪 —多彩なその姿—

百庚申は、一石に「百庚申」銘や「庚申」などの文字を多数刻んだ「一石百庚申」と、百基または多数の庚申塔を一か所に造立する「多石百庚申」があり、その目的は祈願のための供養は数多い方が有効との「数量信仰」に基づくといわれます。

多石百庚申は、私の調査では、千葉県内に 42 例（表 1）ありました。この中で、多石百庚申の先駆けとなるのは、文政 12 年（1829）の印西市松虫の百庚申（表 1.No.22）で、青面金剛像塔 100 基を一時に建立し、灯籠一対も奉養しています。続いて柏市域など利根川流域で、天保期から幕末にかけて、数多く建立されますが、像塔の割合は文字塔に比べて少なくなり、やや大きめの像塔 10 基と定形の文字塔 90 基がセットの百庚申が主流となります。天保年間に建立された鎌ヶ谷市大仏の八幡神社（No.41）、印西市武西（むざい No.24）と市浦部（No.25）の百庚申はこのパターンで、文字 9 基おきに像塔 1 基を配置する建立当時の姿を今もよく伝えており、それぞれ各市の指定文化財になっています。

すべて文字塔という多石百庚申も野田市や流山、松戸市の江戸川流域にみられます。

流山市の東福寺の百庚申（No.38）は自然石に「庚申」と刻んだ風雅な塔、また前原東五丁目の百庚申（No.42）も文字塔のみの百庚申です。

百庚申の中央に中尊を配置する事例は、松虫のように百庚申建立以前の庚申塔を置く場合と、武西のように百庚申建立以後も追加される場合があります。

石塔群の形態は、定形の駒型石塔を列状に配置する事例のほか、利根川下流域の東庄町域や匝瑳市域では、丸く細長い枕状の飯岡石自然石に「庚申」と刻んで多数集積する形態の百庚申が多く、匝瑳市大浦路傍の百庚申(No.11)は、元文二年銘の青面金剛塔の下に、飯岡石製の「庚申」銘塔を隙間なく立てています。

地域的には、東総から利根川流域と、野田から南下する江戸川流域に多く分布する一方、内陸の八千代市・白井市と東京湾岸の千葉市・市川市では、悉皆調査によっても多石百庚申の報告例はありません。

また、幕末から明治にかけても、百庚申の造塔事業は行われており、印西市笠神の笠神社(かさがみしや)の百庚申(No.20)は慶應期(1865~7)、笠神の蘇羽鷹(そばたか)神社の百庚申(No.21)は明治16年~昭和10年(1883~1935)の造営です。

### 3. 私が最近調査した印西市域の「百庚申」の事例

#### (1) 松虫の路傍の百庚申 (No.22)

印西市松虫には松虫姫伝説の古刹松虫寺があり、その山門前の路傍に青面金剛像を刻んだ50基、少し離れた杉自塚(第二地点)に同じ仕様の50基と計100基が半数ずつ二つの地点にありました。

昭和46年建立の移転記念碑「松虫百庚申之碑」、享保18年(1733)銘の青面金剛像塔や灯籠などの残欠もあり、記念碑の銘文により、「松虫百庚申塔」と呼ばれた青面金剛像群は、元は区内長作に文政12年(1829)願主右兵衛氏など有志17人によって建立されたが、千葉ニュータウン用地となり、この地に移されたことがわかりました。また『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』から、もとの場所は、松虫寺から500m位南、現在の北総鉄道の印旛日本医大駅の東側線路の脇あたりと推定されます。同報告書には写真も掲載されており、道沿いに百庚申が立ち並ぶ壮観な姿が残されていました。

#### (2) 印西市笠神の笠神社の百庚申 (No.20)

旧本埜村の「笠神様」とよばれる神社境内には、左右二列に、慶應元年~3年(1865~7)の3年間に建立された「百庚申」が立ち並んでいます。青面金剛像塔17基、「庚申塔」銘文字塔78基、計95基。大きさは、像塔が高さ60cm前後、文字塔が48cm前後で、いずれも駒型です。

青面金剛像の像容は、剣とショケラを持つ六臂像で、頭部がとがり、足元の邪鬼は、石工の個性がよく出ていて、その正面を向く姿はとてもユーモラスです。また像塔1基と文字塔4基の計5基分の損傷した石塔が列の後ろに寄せてあり、これを復元すると、元は像塔18基、文字塔82基の計100基で、像塔1基に文字塔4基のサイクルで連続して並べられていたと思われます。

百庚申以外には、5基の庚申塔があり、最古は享保7年(1722)銘の青面金剛像塔です。また慶應3年銘(1867)大型の文字塔は、百庚申完成供養を目的に建立されたと推定されます。

#### (3) 笠神の蘆波鷹神社の百庚申 (No.21)

笠神城の物見台跡と推定される尾根上に鎮座する蘇羽鷹神社境内には、近代になって建立された百庚申が、狭い境内両脇に3群に分かれて整然と並んでいます。

百庚申は、駒型の「庚申塔」銘の文字塔54基と、青面金剛像塔6基の計60基で、右面には一部に建立年月日が、左面にはすべてに寄進者名が刻まれています。内訳は、明治16年(1883)銘の文字塔5基と像塔1基の計6基、明治33年(1900)銘の文字塔17基と像塔2基の計19基、昭和10年(1935)銘の像塔3基と文字塔30基の計33基です。この百庚申の建立には三次にわたって52年間かかっており、近代に入って三世代の人々により造塔が継続された事例は、他に類を見ないものです。

また60基という数は干支の一周の数でもあり、また狭い境内に合わせた数であったと推測されます。

#### 4. 「一石百庚申」の銘から探る「百庚申」造立の意図

「一石百庚申」とは、一石に「百庚申」などの銘がある単一の庚申塔で、北総では一石百庚申の数は11例(表2)と少ないですが、多石型に先立って主に文化文政年間に建立されています。

北総の11例の一石百庚申を分析すると、(1)「庚申百箇度参」「庚申百社参詣」などの参詣型、(2)青面金剛像百体や「庚申」百文字を刻む百体型、(3)「百庚申」の文字のみの「百庚申」銘型に分かれます。

##### (1) 参詣型一石百庚申

榎本正三氏は、寛政12年(1800)の柏市布施弁天の石塔(表2.No.1)の「奉納百庚申百箇度参大願成就」の銘と、印西市松崎・火皇子(ひのおうじ)神社(No.4)の「庚申百社参詣供養塔」の銘文に注目され、百体の庚申塔を巡拝するという庚申信仰の新分野の台頭があり、その対応としてムラ内での百体の庚申塔の建立が行われたと推論されています。また、「百」の意味は、北総地方に根強い信仰のある百万遍念仏、百堂念仏、百観音巡礼などの「百」の思想によるとし、百庚申の成立は百庚申参りの成立でもあり、それに伴って10ヵ所の百庚申を巡拝することによる「千庚申」の成立でもありました。

##### (2) 百体型一石百庚申

多摩石仏の会の石川博司氏は、一石百庚申が群馬・栃木など北関東や多摩など武蔵地方に多いこと、さらに縣敏夫著『図説庚申塔』に掲載の「倉淵・百体青面金剛塔」や、「御霊神社・百書体庚申塔」のように、一石に青面金剛像100体や、「青面金剛」・「庚申」の文字を100または多数刻んだ一石百文字庚申塔があることを指摘しておられます。

#### 5. おわりに

多石百庚申は、百基並ぶ特異な景観から、印西市浦部や鎌ヶ谷市大仏の八幡神社のように、観光名所として注目される場合もありますが、この時代の石質はもろく損傷しやすいため、我孫子市岡発戸(おかほつと)八幡神社(No.27)のように14基のみ残して残欠が多数積み上げられているものや、柏市高田の正徳寺(No.35)のように無縁塔群に置かれているなど、もはや原形をとどめない百庚申もあります。

また市街地化などにより移転を余儀なくされ、松戸市大谷口の神明神社(No.40)の場合は二か所の百庚申を一か所に移転、また印西市松虫では半数ずつ二か所に分けて移転されていました。

印西市武西の百庚申は、その景観のよさもあって印西市の指定文化財として大切にされてきましたが、近年の大規模な都市開発により、大型公園の片隅にフェンスで囲まれて立ち入りができない状態になり、周りの環境の変貌に往時の姿を失いつつあります。

百庚申は、柏市布瀬路傍の百庚申(No.29)のようにムラ往還に列をなして並ぶ姿にこそ、民間信仰を物語る文化財としての価値があり、その調査と共に保存のあり方も問われている現状です。

#### 参考資料

- (1) 榎本正三「武西の百庚申」『房総の石仏』第12号 房総石造文化財研究会 1999年
- (2) 縣敏夫『図説庚申塔』 揺籃社 1999年
- (3) 石川博司「百庚申と千庚申」『野仏』第36集 多摩石仏の会 2005年
- (4) 入谷雄二「松戸・大谷口神明神社の百庚申」『房総の石仏』第20号 2010年
- (5) 蕨由美「印西市域と北総の「百庚申」について—最近の調査と知見から—」『房総の石仏』第26号 2017年